



# ドクター板東の メディカルリサーチ

Vol. 33

～これからも ソフトと野球 永遠に～

<http://hb8.seikyou.ne.jp/home/pianomed/>

北京五輪で、日本の女子ソフトボールが優勝して金メダル、おめでとう。前日から上野投手が3試合を連投し、日本中が感動した。しかし、銀のアメリカも銅のオーストラリアも強豪だ。ほんの少しの差で、この結果になつたと言えよう。

## 五輪スピリット

そもそも、近代五輪の創立者であるピエール・ド・クーベルタン男爵（図1）はフランスの教育者である。氏が「参加することに意義がある」と提唱していたのは、誰もがご存じであろう。しかし、近頃はこの価値觀が古くなり、忘れられるかのように思える。マスコミの報道手法や選手のコメント、人々の評価が変わりつつあるからだ。

金、銀、銅、入賞、予選落ちと順位がつく。一瞬で一度しかない競技会だからこそ、確かに値打ちがある。プロセスは関係なく、結果がすべてかもしれない。しかし、過剰な期待によって、選手に対してさまざまなプ

レッシャーをかけてしまうのは、いかがなものかと感じてしまう。

## 野球とソフトボール

それよりも、私が今回気がかりなものがある。野球とソフトボールが、今回の五輪を最後に、残念ながら、競技種目からはずされてしまうことだ。

そもそも、野球という言葉は、正岡子規が命名したという。子規は野球青年で、本名は升（のぼる）。名前がのぼるで、ボールが空高く昇ることから、「野のボール」つまり「野球」になつたと。証拠として、葉書の中で、自分のことを「野球」と署名し、「のぼる」と読ませているのだ。

その後、日本でプロ野球が誕生して発展し、最近は国際化が叫ばれ、ワールド・ベースボール・クラシック（WBC）第1回大会（2006）でも日本が優勝したのはご存じの通り。

一方、日本の女子ソフトボールも国際大会で活躍中だ。もっと競技人口が増えほしいと思っていた矢先だった。

五輪で競技があると、子供たちが憧れ、野球やソフトボールを目指す子供たちが多くなる。この影響は、今すぐではなく、10～20年先に現れてくるだろう。



図1

## 徳島市 草野球・おはようリーグ



### 20周年記念 22人参加 「夢の舞台で全力プレー」

徳島市内の草野球の古参「おはようリーグ」（高利雄会長・土井一郎）が、リーグ結成20周年を記念して三十日、東京ドームを借り切りて紅白試合をする。参加メンバーは夢のドームで思い切ってプレーをする」と心を願っている。

「おはようリーグ」の二士人が参加する。参加者が多い「阿波観光」「ABC」両チームが一人による運合車など、残り八チームによる「おはよう」が選抜する。高源会長の発案で東京ドームでの記念試合決まり、八月末にメンバーが集まつた。東京の草野球チームとの東西対抗戦を定めていたが、スケジュールの調整が難しかったため、リーグがメンバー同士で紅白戦をすることになった。

東京ドームの使用料は三十五万円（二時間）、参加費用は一人三万五千円。一行は千五百人後半時にバスをヤクターリーで徳島を出発。三十日午後零時から試合をする。「おはようリーグ」は、グラウンド探査や対戦チークの懇親会などを実施して、六チームでスタートした。

筆者は、子供のころから野球が大好き。51歳となつた今でも、現役だ。また、小学生からソフトボールのピッチャーを担当し、城南高校のときには、高校総体で投げたこともある。

大学のときは、準硬式野球部で白球を追いかけていた。その後、30歳を越えてから、スイッチヒッターに転向し、打率はいつも3

図2

～4割ほどである。

今までに、野球の諸先輩方や同僚に長年お世話をなめり、素晴らしい経験をさせてもらつた。野球仲間で「東京ドーム」を借り切つて野球をしたことも（図2）。

そのとき徳島新聞に掲載された写真が図3で、左打席の選手は私である。

引き続き、皆でリーグやトーナメントなどを企画し（図4）、30周年記念誌も発行してきている。

## 素晴らしい野球仲間

たかが草野球レベル、されど野球への情熱は一流だ。野球で培われた人脈は財産



図3

## 野球人の分析

野球経験者同士は、言葉を超えて、共感しあえる波長や潜在意識があるように思える。どんなファンタジーが

- ③人生を楽しみながら社会に貢献したいという前向きな姿勢
- ②自分に厳しく人には優しい気質
- ①野球クラブで育まれた強靭な精神力

で、先日、野球仲間と一緒に飲む機会があった。

その面々は、尋常ではないほど嬉しい。かつて浪商のドカベンこと香川選手を三振三振にした剛速球投手。

また、法政の江川選手と投げ合つて1対0で勝つた豪腕投手。さらに、鳴門高校始まつて以来の天才野手で実業団で活躍した内野手など。いずれも現在は、医療・健康業界で仕事をしながら、野球の指導や世話を続けてきている。

引き続き、皆でリーグやトーナメントなどを企画し（図4）、30周年記念誌も発行してきている。

一緒に楽しく語り合いながら感じたことが。野球を極めた選手には共通点があるようだ。つまり、

第一回 おはようトーナメント

第一回 おはようトーナメント	
【1回戦】	第4-3 ウインズスポーツクラブ ブッチャーラ合 6-0 ブリントホーテル 第4-1 ヤンキース 和(不動産) 徳島ホーフ
【2回戦】	第5-1 ピザースクープ 第3-2 ブリッヂー合 第4-2 フィーノ 第5-0 阿波銀行
【決勝】	バイレーツ 4-1 第4-2 和(吉井) 佐藤光弘ホテル バイレーツ優勝 フィーポール!!
【決勝】	バイレーツ 10-1 和 合 バイレーツ優勝 フィーポール!!

図4

関わっているのか、自分なりに考えてみたい。

第一に、野球のイメージとして、高校野球のモデルがある。教育の一環でもあり、規律・礼儀に厳しい。挨拶もきちんとできるよう指導されているため、社会人としても評価される。

第二に、野球とは、剣道や柔道、弓道と同様に、「道」を極めるもの。絶え間なく自己鍛錬を続け、武士道の精神も備えている。これらに共通するのは、「勝負」。

野球は9人だが、投手と打手で守備。数千回数万回の地道な積み重ねで、一つ一つの技術がゆっくりと上達していく。周囲の人々の協力が不可欠なのだ。

第四に、苦しい練習を経た体験が血となり肉となる。

試合で勝ち笑い、嬉しくて涙することもあれば、負けて悔しくて泣くことも。栄光だけではなく屈辱や挫折も味わう。

抜きん出た体力や技術で活躍するレギュラーもいれば、万年補欠やベンチウォーマー、スタンドで応援のみの選手もある。しかし、誰にもそれぞれの役割がある。クラブではなく自分の仕事を見直す必要なのだ。どんな上手な選手でもエラーを犯すことがある。チャンスで凡打するこ

者との真剣勝負である。漫画「巨人の星」でも、最近の映画やドラマ「ルーキーズ」でも、速球勝負が魅力をさらに盛り上げる。

第三に、野球は指導や援助がなければ、練習ができるない。ボールを投げてもらって打撃。ノックしてもらって守備。数千回数万回の地道な積み重ねで、一つ一つの技術がゆっくりと上達していく。周囲の人々の協力が不可欠なのだ。

第四に、苦しい練習を経て、ぬか喜びするものではない。相手の立場や心情も考えなさい」と。これは、相手チームや選手のこととも言われた言葉を思いだす。

第五に、敗者への配慮を挙げたい。野球人は、勝つ喜び、負ける苦さを知っている。王貞治選手が父から「試合に勝ったからといって、ぬか喜びするものではない。相手の立場や心情も考えなさい」と。これは、相手チームや選手のこととも言われた言葉を思いだす。

第六に、野球の心臓と言えよう。

つまり、野球の経験によって、素晴らしい人格という結果に加え、苦しいプロセスに伴う逆境、屈辱にも耐える強い心、周囲の人への感謝と気配りもできるようになるのである。

（板東浩、ばんどうひろし、医学博士、糖尿病専門医、

